



招
吟
さ
ま

今

東
光

渡交社版



Printed in Japan

定 價 240 円

地方賣價 250 円

昭和三十三年二月二十日初版発行
昭和三十三年二月二十日再版印刷
昭和三十三年三月一日再版発行 ©
お 吟 さ ま

著 者

發行者

印刷所

發行所

今 東 光

千 嘉 治

大日本印刷株式會社
關西支社

京都市上京區堀川通寺ノ内上ル
株式會社 淡交社

電(四)一五〇七・一五〇八番
振替 京都 四五七八番

亂丁落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします

お
吟
さ
ま

その一

お三人目だから、お三さまとお呼び申してをりまするが、お小さいときにはお龜さまと申上げましたさうで。

お吟さまと申上げますが、女は氏あつて名が無いのでござりますから、家方ではお三さまで通つて居りました。

御主人のお吟さまとは同年でござりましたので、河内國若江郡かわちのくにわかつかたはらの沼べりの村から、はるばると御奉公にありましたときは、誰しものやうに泣き明した夜もござりましたが、お吟さまづきとなつて朝夕かしづき、お給仕やら、御召換へやら、御入浴と御介添へ致しますうちに、御むつび合ふ御間柄となつて、お次の間に休ませて頂くほど御不憫を御かけ下され、いつとなく御心のたけなど御打ち明け遊ばされるほどになりました。まことに不思議な仕合せでござりまして、平戸渡りの瑠璃たまじの櫛やら簪やら、見たこともない御頭の御飾り物から、美しい御小袖、

金糸銀糸で縫取りした御帶など應揚にたまはり、泣き明した夜のことなど遠い夢のやうに忘れて仕舞つたことごとります。

秋の夜更けなど間まの御襖を閉めさせたまはず、夜のふけるおもしろさに何時までも御寢遊きましばされず、生國の御物語を御せがみなされ、間近に聳える生駒山の山裾にひろがる河内野を、うねうねと蛇のやうにうねり曲つて流れる大和川といふ大河と、それに添ふて數へきれぬほどの沼やら池やら、その間に点綴する村々の、とりわけて古の歌垣にもくらべられる夏の夜の踊りのおもしろさ。

『その唄を聞かせてたもれ』

と御せめ遊ばし、枕にうつぶせになつて低い聲して

人と契らば

浅くちぎりて

末とげよ

もみぢ葉を見よ

濃きがまづ散る

ものに候

と歌つてお聞せ申しますと、ほとほと御感心遊ばされ

『河内者は情知りよの』

と仰せられたのであります。その御言葉がいかにも感に堪へて聞えましたので、はつとしてお吟さまのお顔を御見あげ申しますと、短檠たんけいの灯影に背らを御むけなされましたが、ありありとお顔をお染め遊ばしたかにうかがへたのでござります。それからは一入お情を蒙りましてござります。

朋輩の大方は泉州生れが多うございましたが、河内者も少くはござりませんで、いちばん年若なところから御不憫がかりましたものでござりませうか。

屹としたことは存じませぬが、大宗匠様の御母堂とやはは、遣明船の末吉丸とか申す大きな御舟を御所持なされた河内國平野郷の末吉様から御興入れ遊ばされた由に承つてござります。平野郷では末吉家やら御一族の成安家やら大分限者たいぶんげんやでござりまして大宗匠様の御舍弟にあたらせられる宗巴様の御娘も成安家の道慶（桂）様の、いづれは嫁御寮との御約束とか洩れ承つてござります。御當家と河内との御因縁の深いのは、あらましこのやうな次第でござります。それゆゑ奉公人も殊のほか河内者を召し寄せられる趣きに承つてござります。隣國との深い御誼みは、ただ格式とか、氏素性とか、財寶の多寡ばかりでもござりませぬさうな。永祿の頃とか

承りましたが、御上洛遊ばした織田様から堺津へ對して、何でも難しい儀を御持ちかけ遊ばされ、御會合三十六人衆や、納屋十人衆など頭立たせられた御方々も、二万貫文の矢錢とやらに御運も盡き果てたと思召され、櫓を築き、堀を深うし、菱の實をまいて御合戦の御用意のとき、女子供の足弱はともかくも河内國に落し參らせたさうにござります。その代り生駒山の峯つづき、信貴の御城にこもられた松永彈正様の御合戦の砌りには、さしづめ河内野が御合戦場と相成りましたので、河内の御親戚が和泉へ立ち越えて、御當家へも御避難あそばされたかに承つてござります。これも戰國のならひでござりませうか。

河内國は御存じのごとくに海と申すものがござりませぬ。わたくしなども沼よりほかには見も知らぬ村落に生ひ立ちましてござりまするので、深野ノ池など世の中にこれほど大きな池は他にあるまいものと存じてござりました。それが御當家に召し使はれましてからは、潮干狩やら住吉詣やらと、果てしも知らぬ海原といふものを見せて頂きましたこととでござります。井戸の中の蛙といふ譬へがござりますが、まこと河内野の青蛙が海を見たのでござりまするので、ただ驚きあきれるばかりでござりました。とりわけ御親族の納屋衆の御一方と承りましたルソン助左衛門様と仰せられる御方様が、遠い南の海を越えてルソン島（フィリッピン群島）から堺津へお歸り遊ばしました時と、エスパニヤの南蠻船なんばんふねがこの港へ入つた折のことは忘れる

ことが出来ませぬ。ともに大砲を打ち鳴らし、華やかな御上陸なされるのを、大勢の人々と共に櫓子窓れんじまどから垣間見たことでござりました。

南蠻船のカピタン様と仰せられる船長は、御會所の御招きの後、御當家の茶湯に招じられて御越しなされました。背の高さは六尺有餘もござりませうか。白磁はくじのやうな白い肌をされ、お頭の赤毛は御佛のやうに縮れて、御鼻は曲つた鍵鼻で、御眼の玉はビードロのやうに青く澄んで凝つと見つめられると身がすくむやうに存ぜられました。それが黒羅紗の異様な御服裝にモールが燦然と輝き、シャポーといふ冠り物を召されました。御書院に御通りなされ、御長持に緋毛氈をかけたのへ御腰をかけられ、人の生血いすちのやうな赤い御酒ごしゆを下されましたが、お吟さまは大層御意に召した御様子でギヤマンの高杯でなみなみ一杯召しあがられましたとござります。わたくしにもと一杯、頂戴いたしましたが、河内では孕み女に鯉の生血を吞ませまするが、その生臭い匂ひを思ひ出しますと、何やら胸がつかへて御遠慮つかまつりましてござります。

これは後のお話でござりますが右大臣信長様は、この鳥毛のついた冠り物を召されて、御馬揃ひに綺羅を飾られましたさうで、太閤様もこの生血のやうな御酒をいたく御たしなまれ、御珍重遊ばされた由に承つてござりまする。

總別、南蠻の御方はお女中を御大切にてもなされ、沓脱石から御縁側にお運びのときなど、わざわざ御手をかけられて御介添へなされます。わたくしごとき召使の者さへ、御腕をお貸し下され、耳の付け根まで赤うなりましたことで。河内の親など南蠻人と腕を組んでゐる姿など見ましたなら、さだめし氣を失ふことでござりませう。堺津ならでは見られぬ風情と思召し下されませ。

御吟さまも御家柄、御數奇の道にかしく、かういふ時などカピタン様の御所望もだしがたく御点前を遊ばされました。お女中の御点前など茶湯では見聞きも致しませぬことながら、お女中を上座に据ゑられる御國振りの御風俗とて、この時に限つて、御母君の宗恩様御介添へ、御父君の大宗匠様の御差圖によりまして、見事な御点前でござりました。カピタン様御歸館の後、大宗匠様の御言葉として

『數奇と風流の道には老若男女の別あつてはならぬもの。吾より後の人は、女点前を考へなうてはならぬ喃』

と仰せがござりました。わたくしなど數奇の道は合点が参りませぬが、お吟さまの御優美な御点前を拜見いたしまして、女ほど御点前はしほらしく、柔しく、美しく存ぜられましたことでございます。

もとよりカピタン様には御茶席の書軸や香爐や釜など、いかほど天下の名器をととのへばとて存じ寄りもござりませぬ。御當家御秘藏の珠光青磁の御茶碗でと存じて居りましたところ、大宗匠様の御肝入りで、今焼の織部様御手造りの御茶碗を御用意遊ばされたのが、いたくカピタン様の御意にかなひ、そのまま御土産としておもたせなされました。これは黒織部の大振りの御茶碗にクルス（十字架）が白抜きに現はれて居るものでござりました。いかさまきびきびとした御あしらひと存じ、流石に三千石の天下の御茶道と感じ入ったことでござります。

御承知のごとく大宗匠様には御先妻様がおありでござりました。公方様くばうさまの御相伴衆で、五畿内を御獨りで御治めになられた三好修理大夫すりのたけだう長慶様の御息女で、度々の御合戦に堺津へ御成り遊ばすうち、大宗匠様を御見込みで御息女を御内儀となされたとの御噂でござります。この御腹に紹安さま即ち道安さまが御生れになつたことは御案内の通りでござります。斯様なことも、もとはと申さば大宗匠様と實休様とが紹鷗宗匠の御同門の因縁でござりませうか。筑前守様（長基）の御次男の實休様は、御兄君の長慶様の御命にて泉州の岸和田城におはしました。が、堺津の南莊にも御別邸がありまして、大宗匠様とは格別の御昵懇の御間柄であられ、されば御兄君の長慶様御息女を御とりもち遊ばされたやに承つて居ります。はからずも實休様は畠山様との御合戦に、久米田に御陣取りの折柄、流れ矢に傷付いて御かくれになりました。まだ

御壯年の砌りで。

御舍弟を御失ひ遊ばされ、憑みに恩召す御一子の義興様が暴かに御他界遊ばされ、人の御噂には流石に剛氣の長慶様も茫然となられ、終日、御もの言ひも少く御なり遊ばされて、これまた殿方の御厄年に御他界遊ばされたことでござります。よしなき人の口の端は、義興様に松永彈正大弼様が御毒を盛られたなどと、あらぬ噂を囁き散らしたことでござりましたが、まことに義興様の御天折こそ長慶様の御命を締め参らせたかと存じまする。

長慶様並に實休様御他界の後、次第に御夫婦の御仲よろしからず、長らく御別居の後に、御内儀は御當家から御生國の阿波國へ御移り遊ばされたさうで。海をへだてて四國におはします御母堂への道安様の思慕の情は並ならぬもののやうに存ぜられますこととでござります。思ひなしか大宗匠様と道安様とは御氣質ばかりでなく、しつくりせぬやうに伺へるのでござりまするが、これは僻目かと存ぜられまする。

今の御内儀は、大宗匠様の御意に召した御方様だけに、まことに申し分のない御主人様で、御奉公するわたくしどもまで影ながら御褒め申さぬはないほどでござります。御身は御大名の御息女に御生れながら、誰にもへりくだつて御あしらひ遊ばされ、天下の御指南様の御内方として、これほど行きとどいた御方様は先づあるまいと存ぜられまする。御當地の猿樂大夫宮尾

道三様の御娘でおはします。

御存知のごとく猿樂法師は、大和春日社の四座、近江日吉社の三座をはじめ、京など手猿樂がもてはやされましたが、堺津も富裕な土地柄とて、宮尾一座がござりました。その頃、大和と河内の國境、信貴山に御城を御構へなされた彈正久秀様は、茶湯は紹鷗宗匠に御稽古でござりましたので、従ひまして宮尾の猿樂一座をも御最良あそばされ、道三たうさん大夫の御娘に御手がついて御仲に御子二人まうけられてござります。久秀様も京畿に御威勢を振ふて居られました、織田様へ御降参遊ばされ、そのまま大和河内の御大守として以前に變らぬ御羽振りでござりましたが、御連の盡きましたものか、程なく織田様に對して御謀反遊ばされ、多聞城も落ち、やがて信貴山城へ御籠城の御羽目と相成りました。それでも始めのころはひそかに堺津へ御便りなどもござりましたさうですが、十重二十重に圍まれてからは蟻の這ひ出るすきもなく、宮尾一座は笛も太鼓も鳴らぬ日がつづいたと申されます。織田様の攻め振りが御手ぬるいといふ噂が立ちましたのは、もとより彈正様の御武勇もさることながら、彈正様御秘藏の平蜘蛛の釜に織田様御執心で、さればゆるゆると御命乞にひきかへて、この御釜を召されやう思召しとの御噂でござりました。松永様もよく惜しみ給ふたとみへまして、平蜘蛛の釜と御自分の御首は未來永劫、信長殿の見參にいれまいと仰せられ、御落城の砌り、この釜を微塵に打ち碎か

れ、御首と共に火藥で粉々に燒き碎いて、御一族もろとも御滅亡遊ばされたのでござります。

その御嘆きも薄らいだ頃、大宗匠様といつしかわらない御仲だつたなどと、口さがない御噂を立てられましたほどで、大宗匠様の二度目の御内儀として千家へ御興入れ遊ばされたのでござります。それほど御二人の御仲は、はたの眼にも睦まじうござりました。

御内儀は彈正様の御二人の御子を連れ子になされ、大宗匠様も恰ら御自分の御子のやうに慈しまれたのでござります。まことに如何なる御月日の御生れか、生さぬ御仲の父君ながら、産の親にもましての御可愛がりやうに、この御子は虫氣もなく御育ち遊ばされたと申します。左様の次第で、上の男の御子様の道安様とは御同年でござりました。宗淳様（少庵）のこととでござります。御幼名を吉兵衛様と申し上げ、御元服の後に四郎左衛門と申されました。御妹様がお吟さまでござります。これで御わかりのごとお吟様は五畿七道に人も恐れた松永彈正太弼様の御胤で、御幼名をお龜様と申上げました由ですが、わたくしどもはお三さまと申上げて居ります。

かやうなことは誰が語るともなく人の知るところでござりまして、堺津では誰知らぬものもないのでござりまするが、をかしなことは道安さまと少庵さまとの御氣質の違ひが、御出生を疑ひたくなるほどで、そこからまこと嘘ごとが入り混つて來るのでござります。と申しますの

は道安さまの方は御性質が荒々しく、従ひまして茶湯御稽古も凄じい氣迫で、諸事強い御好みでござります。それゆゑに、もしかすると彈正様の御胤は道安さまの方ではないかと思ひ惑ふほどでござりました。それにひきかへて少庵さまの御性格は、お女中にも見まがふほど柔しく、平生も物靜かにいらせられ、茶湯の御稽古の後は、笛や鼓を遊ばされて、お吟さまとつばら遊藝三昧に親しまれ、これがあの鬼より恐ろしい公方様殺しの張本人の御胤であらうかと疑ふほどでござります。それゆゑに出入の衆まで、このやうな間違ひを人様にも語るものとみえまして、御當地の人の中には左様に心得て居るのもござります。大宗匠様の佗び茶の御好みから申しますれば、あるひは少庵さまの茶湯の方が法にかなうて居たのでござりませうか。

ある時、大宗匠様が京より堺へ御戻り遊ばされ、御内儀の宗恩様と久々振りにお語らひの後、さて申されるには

『御殿にて石田治部少輔殿が、わざわざわしを物かげに呼ばれ、お吟を万代屋もっやにやつてくれ、折入つて頼むと仰せられた。口吻によれば宗安は、かねてからお吟を戀ひ慕ふてゐたさうなが、わしの許で茶湯稽古をしながら、素振りに、まして口の端にものぼせなかつた。他ならぬ利け者の治部殿の肝入りぢや。情なさけなう斷りもなるまい。そなたの意見を聞かせてたもれ』

『御意のままに』

と宗恩様は仰せられたきりだつたと申します。

太閤様御前で万事を切り盛りする石田治部三成様の御威光には、徳川内府様さへ御遠慮あつたと申すほどでござりました。その治部様の御聲がかりと申し、まして万代屋宗安様は御家柄といひ、茶湯の高弟といひ、申し分ない御縁と思召されたのでござりましょうか。お話ほとんどとんと運んで、お吟様はいよいよ万代屋へ御興入れと話が進んだのでござります。

それからといふものは、わたくしなどまるで何やら華やかな夢見心地と申すもので、御婚禮の御支度に御當家は色めき立つたのでござります。

豪華な色小袖が染めあがつて来る度毎に、それを縫ふもの。縫ひあがるとそれをお吟さまに一度お着せ申すもの。絢爛な帯が出来あがると、また大騒ぎして、この帯はあの小袖に、あの帯はこの小袖にと、これまたひと騒ぎでござりました。さういふ中でお吟さまだけは日毎、お瘦せになるやうに御見受いたしましてござります。何か御氣にむかぬものがあると、これは朝夕かしづく眼に狂ひはなく、わたくしは夜分ひそかにお質ねいたしますと

『ちつとも楽しうない』

とだけ仰せられて、はらはらと御涙を流されたのでござります。